

## 歴史用語の英訳に関する諸問題 ——『五代帝王物語』の基礎英訳を通して——

亀井ダイチ 利永子

### はじめに

英語圏、または国際的な文脈での前近代日本史教育及び研究において、第一次史料の英訳は必須の作業である。前近代日本史（本稿では江戸期以前と定義する）に関する史料としては、古くには日本書紀や古事記の英訳があり、また律令等を始めとする法律関係の史料、万葉集・古今和歌集等の和歌集、源氏物語を代表とする物語文学、栄花物語や大鏡等の歴史物語、神皇正統記等の歴史書等、多くの史料が英訳され、研究・教育に貢献している。またここ近年のグローバル化や国際共同研究の発展もあり、歴史用語の翻訳には多くの関心が高まりつつあり、訳語をまとめたデータベース等も作成されており、研究に活用されている<sup>1)</sup>。また同時に、かつて行われた英訳の史料を再検討する試みも進められている。

本稿は中世に成立した編年体の歴史書『五代帝王物語』を例に取り上げ、筆者が少しずつ進めているその基礎英訳作業等を通して得られた歴史用語の英訳に関する根本的な問題を、英語圏における議論を紹介しながら述べるものである。

### 『五代帝王物語』とは

まず基礎英訳作業の対象として取り上げた『五代帝王物語』について述べておきたい。『五代帝王物語』は編年体の歴史物語として定義づけられることが多い書である。冒頭部分に「神代より代々

の君の目出き御事どもは、国史・世継・家々の記に委く見えて<sup>2)</sup>」とあり、勅撰の六国史や私撰の歴史物語、各家に書き伝えられた日記などの歴史記録を意識し、これらの系譜の上に歴史を記述していこうとしていたことが読み取れると指摘されている<sup>3)</sup>。

作者に関しては、本文の記述を基に今までに幾つもの説が立てられてはいるものの、特定はされていない<sup>4)</sup>。また成立年代については1302年11月から1327年の間であることには諸説ほぼ一致するところであるが、弓削は原文の記述の一部を手掛かりにその成立年代を更に狭めて1302年11月から1306年12月辺りかと推定している<sup>5)</sup>。鎌倉後期、後二条天皇の治世以降、既に持明院統と大覚寺統間での両統迭立が行われていた時代である。題名に使われている「五代」とは、後堀河（1212～1234、在位1221～1234）・四条（1231～1242、在位1232～1242）・後嵯峨（1220～1272、在位1242～1246）・後深草（1243～1304、在位1246～1260）・龜山（1249～1305、在位1260～1274）の五代の天皇を指す<sup>6)</sup>。1221年7月の後堀河天皇の践祚から書き起こされ、1272年5月の後嵯峨院の百箇日法要までの52年間について各代の事歴が述べられているが、各代に同じぐらいの分量の紙面が割かれているわけではない。上記五代のうちでも圧倒的に記述が多いのは後嵯峨の時代であり、この代に関しては、他の代では記されていない天変地異や社会的、外交事件、仏教界の騒動など後嵯峨の治世全般の大事件、また後嵯峨院自身の事蹟にも言及されている<sup>7)</sup>。この点、「五代」とは言っても内容にばらつき

はみられるのだが、『五代帝王物語』全体を貫く内容として存在するのが、皇代記としての性格である。弓削は『五代帝王物語』の内容を検討した上で「この書が皇位継承を軸とする皇代記の形式を取ることは明らかで、各代この枠組みのもと、最初に帝王の降誕・元服・立太子・踐祚・政始め・即位などを記し、続いて摂関のことや女御の入内・立后・院号のことに及ぶが、中でも特徴的な点は、摂関及び関東将軍の交替を重視してその全てを公式の日付け付きで記し留めていること<sup>8)</sup>」だと述べ、南北朝時代の先駆けとなる両統迭立の開始前後の朝廷の歴史を、公家社会における権力者の交替と鎌倉将軍および執権の継承史に関心を払いながら記していることを確認している。

この書の歴史的価値については「歴史といっても、記事は公家社会のありふれた事柄が多く、持明院・大覚寺両統迭立の原因となった後嵯峨上皇崩御前後の処分状披露に関する部分が、注目を集めているに過ぎない」（国史大辞典『五代帝王物語』）としてその史料としての価値は高く評価されていない向きもあるが、それは必ずしもこの書が英語圏における中世日本史研究において重要性を持たないということの意味しない。中世日本に関しては江戸期までの前近代日本史の中で最も研究が進んでいる時代のひとつではあるが、それは鎌倉前中期か室町後期から戦国に偏っている傾向があり、この『五代帝王物語』が扱う鎌倉後期に関しては決して層が厚いとは言えない時代である。また法制史、政治史、社会史がその大半を占め、鎌倉時代に関しては武家側からの視点が主であり、京都の朝廷側、それも天皇家だけではなく朝廷を構成する公家の視点からこの時代を描き出した研究は未だ多くはない<sup>9)</sup>。また『五代帝王物語』の作者については不明ではあるものの、両統迭立の時代の中で、大覚寺統側にあったであろうことが指摘されている<sup>10)</sup>。両統迭立、南北朝に関する研究も限られている中、その両統迭立の原因となった後

嵯峨の事蹟に多くの紙面を割き、後の南朝として発展してくる大覚寺統側の立場で記されたこの「五代帝王物語」は、すでに英訳のある増鏡と合わせてこの時代の朝廷及び公家社会の視点を示すものとしてより広く知られても良い史料だと考えられる。

### 「天皇」の英訳を巡って

近世史に関する訳語問題について、ジョン・ポーターは「英語表現を選定する時に、当然のことながら、まずは訳そうとしている概念の意義や本源的なあり方を正確に把握しなければならない。それにくわえ、その概念の歴史的展開あるいは変容過程をもきちんとおさえる必要がある<sup>12)</sup>」と述べているが、これが歴史用語を翻訳する上で必須の視点であることに異論はあるまい。特に、江戸期以前の歴史は premodern history (前近代史) としてまとめられがちな英語圏においては、ここに関する配慮がより一層必要となろう。一般的には同じ用語であれば同じ訳語を使用するのが基本となるが、果たして歴史用語に関してはそれが望ましい形なのかというと、一概にそうとは言えない。なぜなら、時代を超えて使われている歴史用語では、それが意味することも変わっているわけであり、またその用語が使われた社会構造も異なるからである。その顕著な例として「天皇」の英訳に関する議論をここで紹介しておきたい。『五代帝王物語』には、皇代記という性格ゆえに題名が示す五代の天皇だけではなく、それ以前の天皇の名も言及される。また「主上」「院」「法皇」といった現天皇・元天皇であった人物を示す表現だけではなく、実際にその題にも「天皇」の用語が使われている。『五代帝王物語』という書名自体が「五代の天皇」の時代を語るという意味を持つ以上、天皇という言葉の英訳についての議論を理解することは、この書の英訳全体に関わってくる問題だから

である。

現在、天皇の訳語として一般的に知られているのが emperor である。宮内庁も正式な訳語として emperor を使っており、<sup>13)</sup>これに関しては特に異論がないように思える。では、英語圏の歴史研究者

たちは今までにどのような言葉を天皇の訳語として使ってきているのか、また天皇を英訳するのにどのような説明（あるいは注意点）を加えているのかを、大まかに対象となる時代順にまとめたのが次の表である。<sup>14)</sup>

### 「天皇」に関する訳語<sup>15)</sup>

	対象となる時代	対訳語 <sup>16)</sup>	説明文 <sup>17)</sup>
①	古代	Heavenly Sovereign	A Japanese style designating the tennō, or Heavenly Sovereign. It may have also been used for the Great King in the pre-ritsuryō era, but most scholars accept that the title came into use during the later seventh century.
②	古代	Tennō, emperor	“[H] eavenly sovereigns” or “emperors.”
③	古代から平安末期頃		The Heavenly Sovereign, one of several royal styles for the monarch empowered by the ritsuryō codes. The title seems to have come into use in the late seventh century—wooden documents on which it is used have been excavated and are thought to date from the 670s, from either the reign of Temmu (673-86) or shortly after.
④	平安時代	Heavenly Sovereign, the Japanese monarch	
⑤	紀元前から平安末期頃	Sovereign	Theocratic head of the Japanese state, being the most direct descendant of the Great Sun Goddess (Amaterasu Ōmikami), her high priest on earth, head of the Shintō religion, patriarch of the Imperial Family and the spiritual and blood father of the Japanese people.
⑥	平安時代	Emperor	[Name for the] Yamato King [……] (literally, “heaven [descended] luminance”), conventionally translated “emperor.”
⑦	14世紀		The heavenly sovereign of Japan, a term used to describe the occupant of the throne. Did not necessarily, or for that matter, often, possess sovereign authority, which more often accrued to Dharma, or retired, emperors.
⑧	14世紀頃	Emperor	
⑨	14世紀頃	Sovereign emperor or empress	
⑩	中世		The Japanese sovereign, usually translated “emperor.” When writing about medieval Japan, it is important to avoid transferring European and Chinese qualities associated with the word “emperor” in dealing with the tennō.
⑪	中世	Emperor, sovereign	
⑫	近世	Emperor	
⑬	近世	Emperor	
⑭	19世紀	Emperor	

これをみると、近世以前の「天皇」の対訳語としては emperor とともに sovereign が主なものとしてあげられていることが分かる。ここでこの emperor と sovereign はどのように定義づけられているのか、どのような相違または類似点があるのかを確認しておきたい。Oxford English Dictionary によれば、emperor とは「the sovereign ruler of an empire」、つまり「帝国の最高・最上の支配者」が基本的な定義となっている。<sup>18)</sup> また「commander」として「軍などの指揮官」としての意味も有する。それに対して sovereign は「One who has supremacy or rank above, or authority over, others. Frequently applied to the Deity in relation to created things」——「他者よりも身分や権威において優越性を持つ者」として基本定義されており、また神にも使われる語であることが分かる。より具体的な定義としては「The recognized supreme ruler of a people or country under monarchical government; a monarch; a king or queen」とあり、君主制下における至高の支配者、君主、王や女王にも適用される語である。<sup>19)</sup> こうした定義を見るに、双方とも最高位の支配者という意味は変わらないが、emperor が軍事的な意味を含むのに対し、sovereign にそうした意味はなく、むしろ神性が示唆されている。

上記の表の①から④では、対訳語として単なる sovereign ではなく heavenly sovereign があがっている。これらの例が引かれた研究書が取り扱っている時代は主に古代で、この点『五代帝王物語』とは時代的隔りがあるのだが、なぜ古代において heavenly sovereign の訳語が使われているのであろうか。これは、①、②の文献の著者であるジョン・ピジョーが上記の emperor という語が意味するものが古代の天皇（読み方は「てんのう」ではなく「すめらみこと」）には当てはまらないとして、いわば「天皇」という文字の直訳ともいえる heavenly sovereign を対訳語として提案したこ

とに始まる。ピジョーは何故 emperor が不適切なのか、その理由として次のように述べている。

*Tennō* has been translated as *emperor* in the West because of the assumption of strong parallels between Chinese and Japanese kingship: since there was a Chinese emperor, there must also have been a Japanese emperor. In fact, however, structures of paramount leadership in the two societies have taken very different forms. I also argue that the translation of *tennō* as *emperor* is problematic because the term *empire* is strongly associated with a martial political formation founded on conquest - consider the imperial states of Rome, Persia, and China. In contrast, the *tennō* of eighth-century Nihon did not conquer his realm, he had no standing army save some frontier forces, and the realm remained significantly segmented rather than vertically subjugated.<sup>20)</sup>

大きく分けて理由は二つある。Emperor という言葉は、欧米で古代日本と中国の王権が相似しているという仮定に基づいて訳されている（実質のところ、古代日本と古代中国の王権はかなり相違点がある）ということ。もう一点は（上述した emperor の定義に、empire の支配者とあるが）、empire には軍事力による征服に基づいた政治的形成の意味合いが強く、ローマやペルシャ、中国には当てはまるかもしれないが、8世紀の日本の社会構造には該当しないから、という点である。ピジョーのこの論は、天皇について言及する研究者全体に大きな影響を与え、少なくとも古代の天皇の対訳語として emperor を使う場合には、何らかの根拠に基づくようになった。

例えば、ブルース・バートンはピジョーが文字通りの訳語ともいえる heavenly sovereign を8世

紀の天皇の対訳語として用いたことに対し敬意を払いつつも、emperor を排除することを良しとしていない。その理由としてバートンが挙げているものが①日本と中国の指導権について相違点があるのは事実だが、日本の君主制は中国からの影響を受けたものであり、また「天皇」は「天」と「皇」の二つの字から成り立つが、二つ目の「皇」が意味するものは king や sovereign よりも皇帝を示唆する emperor の意味に近いということ、②8世紀の日本に「帝国」としての empire が存在しなかったのは確かだが、empire にも多種多様な意味がある、という点である。<sup>21)</sup> ハネ・ミクソもピジョーの heavenly sovereign に理解を示しつつも、その著 *Premodern Japan: A Historical Survey* では「英語圏の学生には emperor の方が馴染みがあり、混乱させることがない」ことを理由に、emperor を使っている。<sup>22)</sup>

ピジョーが天皇の訳語として emperor を使うことに反対する理由の一つとしてあげられている「ローマやペルシャや中国等での征服を想起するから」、という点は、英語圏における日本史研究の発展のあり方とも関連する。近世史の翻訳に関して、ジョン・ポーターは戦前から70年代までの英語圏の日本史研究者には、歴史の主要な概念を西欧近世史における枠組みや範疇を通して説明する傾向があったが、それによって日本史の特質が見えなくなってしまうと論じたが<sup>23)</sup>、これは近世史に限ることではなく、古代史にも『五代帝王物語』が扱う中世史にも当てはまる。この点、ピジョーは西洋史の枠組みの中で日本史を理解しようとしてきた前世代の研究手法に訳語の問題を通じて警鐘を鳴らしたとも言えよう。

### 「五代帝王物語」の題を巡って

こうした議論を基にして考えると、本稿の対象としている「五代帝王物語」が語る、あるいは書

かれた時代の文脈の中では、emperor は天皇の対訳語として適切とは言い難い。この時代には emperor の前提となる empire も存在しなければ、五代の天皇いずれも commander としての性格は有していない。この当時の天皇にどれだけの権力があつたのかについては議論あるところだが、少なくとも天皇としての authority (権威) は有している点、意味としては sovereign の方が近い。

では、書名の『五代帝王物語』はどう訳出すべきなのだろうか。今までにこの書に言及した英語文献を調査してみると、そのまま「*Godai Teio Monogatari*」としてローマ字表記しているものが多く、英訳されているものを挙げると以下の通りとなる。

#### 『五代帝王物語』書名の英訳<sup>24)</sup>

	英訳	文献の出版年
①	The Narrative of Five Sovereigns	1939
②	Tales of Five Emperors	1969
③	Tale of Five Imperial Reigns	1983
④	Tale of Five Imperial Reigns <sup>25)</sup>	1985
⑤	Tales of Five Generations of Emperors	1998

これをみると、sovereign と emperor といった最高位の支配者という意味を示す言葉だけではなく、君主としての統治や治世・御代を意味する reign を以て「帝王」を訳出していることが分かる。天皇家に関するものに imperial を使うか、royal を使うかについては議論の余地はあるが、『五代帝王物語』の皇代記としての性格を考慮するに、意味的にこれはなかなか的を射た英訳であると言えるだろう。しかし、書名の「帝王」という言葉は (ニュアンスはきちんと残るものの) 少し薄れていく。ここが書名であることを意識し、その用語を重視して英訳するのであれば、*Tale of Five Sovereigns* が候補として挙げられるのではないかと思う。確かに「帝王」は「天皇」と全く同



一の用語ではない。そして「帝王」の言葉自体には、ピジョーが emperor に異論を呈した原因でもある「軍事的な征服」、「帝国」との意味が「天皇」より強く内包されている。しかし、ここで「帝王」が指し示しているものは間違いなく「天皇」であり、『五代帝王物語』の時代の構造的特質や天皇の権力・権威のあり方を考えるに、emperor よりも sovereign の方が適切だと思われるからである。

### 「女御」の英訳

「天皇」の訳語について述べたところで、天皇に関する用語として「女御」についても考えておきたい。女御とは「平安時代に生じた後宮女官制度の一つ。律令制度では、后一人のほかには後宮には妃二人、夫人三人、嬪四人がおかれていたが、平安時代になると妃・夫人・嬪に代わって女御・更

衣などの名称が生じた（中略）令制の嬪と同じ程度の地位のもの。はじめは四位・五位が多かったが、のちに地位が上がって三位もあり、摂関大臣の娘が女御に補せられるようになってからは、その中から一人が選ばれて皇后となった<sup>26)</sup>とあるように、天皇の正式の配偶者としての立場を有する。後に安喜門院として知られる後堀河天皇の皇后三条有子について「主上は貞応元年正月二日御元服。御年十一。中宮には始に三条太政大臣公房の女、御禊の女御代に参り給たりしが、やがて貞応元年十二月十七日女御として、同二年二月に立后、嘉祿二年七月に皇后宮とす<sup>27)</sup>とあるように、『五代帝王物語』の扱う時代において、女御の位は決して低いものではない。では、その「女御」についてはどのような訳語がつかわれてきたのだろうか。それをまとめたものが下記の表である。

### 「女御」の対訳語<sup>28)</sup>

	対象とする時代	対訳語	説明文
①	平安時代		Junior royal consort
②	平安時代	Junior Consort	
③	平安時代	Consort	An imperial wife whose father was at least a Minister or a Prince. An Empress was normally chosen from among the Consorts.
④	14世紀	Imperial concubine	

これから分かることは、平安時代を対象とする文献において「女御」は基本的に consort という訳語で統一されているということである。この consort とは、第一義が「A partner, companion, mate; a colleague in office or authority<sup>29)</sup>」であり、同じくらいの地位や権威を持つパートナーとしての意味を持つ。こうした広義の定義がより特化され「A partner in wedded or parental relations; a husband or wife, a spouse. Used in collocation with some titles, as *queen-consort*, the wife of a king; so *king-consort*, *prince-consort* (the latter the title

of Prince Albert, husband of Queen Victoria)<sup>30)</sup>」として、婚姻関係を基にしたパートナーとして定義づけられており、王の配偶者としての意味を持つ言葉である。それでは、もうひとつあがっている concubine はどうなのだろうか。Oxford English Dictionaryによれば concubine とは「A woman who cohabits with a man without being his wife; a kept mistress」であり、そこに妻としての意味はない。Cambridge Advanced Learner's Dictionary & Thesaurus はそれに加えて「a woman who [……] lives and has sex with a man she is not

married to, and has a lower social rank than his wife or wives<sup>31)</sup>」と、妻よりもより低い身分だとし、そこにはっきり境界線を引いている。国史大辞典の定義に見るように「女御」の地位も当初の四位・五位から三位にあがったように変遷しているが、14世紀において「女御」が確固たる天皇の正式な配偶者としての意味を有していたことは、上記の安喜門院に関する記事にみえたとおりである。

もちろん、天皇の妻、配偶者として存在するのは女御だけではない。地位としては皇后・中宮の方が上であり、そうした順位を示すために junior consort という junior を加えた訳語が出されているのだが<sup>32)</sup>、妻という関係性を含まない concubine を使うことによって、読み手に「女御」には正式な天皇の妻としての地位、立場がなかったのだという大きな誤解を招きかねない。これは、単に「女御」という存在への誤解だけに留まらず、当時の天皇家の婚姻・家族構造への誤解にもつながる。ティモシー・エイモスが述べるように「選択する訳語は、聞き手の解釈を完全に変えるほどの影響力を持っている<sup>33)</sup>」。訳語の選択に配慮が必要なのはどんな翻訳であってもそうだが、歴史用語に関してはその対訳語が当時の社会構造の解釈そのものにも直結するだけに、それがより顕著にいえよう。

## おわりに

本稿では、『五代帝王物語』の翻訳では避けて通れない「天皇」の英訳についての問題から、その題名、また天皇の妻としての「女御」をとりあげ、歴史用語の英訳に関する諸問題を考えてきた。「天皇」の英訳をめぐる議論からも分かるように、ある歴史用語を翻訳する際にはその用語が指し示すものの本質的なありかたや歴史の変遷、及びその時代の社会構造等を踏まえる必要がある。同じ用語に対して幾つもの対訳語があるのは読み手にとっ

ては混乱を招くもともなるが、その用語が意味する本質が変わっている場合、あえて異なる対訳語を用いることも必要であろう。歴史用語の対訳はその時代への理解にも直結するため、選んだ訳語によっては、その用語が含む多様な意味を失わせ、ある特定のイメージで理解を固定化させてしまう危険性もあるからである。

『五代帝王物語』は天皇や將軍、摂関らの変遷を主に記している。実際、全体を通して目に付く記事標目は「後高倉法皇崩御事」「四条院踐祚事」「後嵯峨院元服事」「今出河相国公經公薨事」「東二条院立后事」「東二条院号事」等等、天皇やその周辺の人々の誕生、成長、位階の変化などが主である。こうした身分や官職に関してはすでにひとつ、あるいは複数の訳語が出ているものが多く、英訳に際しては大きな助けになるのだが、無批判的にそれらの訳語を使うわけにはいかない。該当する時代の社会構造とその時代における用語の本質をきちんと理解した上で、対訳語として候補となる言葉がどのような意味を含んでいるのかを考えて訳す必要があるのである。筆者の『五代帝王物語』基礎英訳作業は途についたばかりでありまだ先が長い、考えるべきは用語の対訳語ばかりではない。この史料が取り上げる五代の天皇の時代、特に公家社会についての英語での歴史的研究は数少ないため、英訳に際しては当時の公家社会についても多々の説明が必要になってくる。的確な英訳は、そうした当時の社会への理解と一体となった上で生み出されていくものなのである。

## 謝 辞

本研究は、立正大学人文科学研究所の平成29年度個人研究助成を受けて行われたものである。ここに記して感謝の意を申し上げる。

## 注

- 1) 東京大学史料編纂所データベースがその良い例である。
- 2) 弓削、100.
- 3) 弓削、31.
- 4) 弓削は今までにたてられた諸説として①山の入道者説、②宮廷公家説、③平兼有（法名寂縁）説、④「藤原広範」説、⑤吉田経長説、⑥源仲直説、⑦源（春日）仲元説の7つをあげ、その各説について検討を加えている。
- 5) 弓削、37-38.
- 6) 今では『五代帝王物語』として知られているが、早くは『五代記』の名で流布し、『五代王記』『五代帝王記』を題に関するテキストがあることも指摘されている（弓削41）。
- 7) 弓削、40.
- 8) 弓削、39.
- 9) この鎌倉時代の公家社会を英語圏で初めて取り上げた研究が、筆者の博士論文『Tools of Authority: The Saionji Family and Courtier Society in Early Medieval Japan』である。  
<http://digitallibrary.usc.edu/cdm/ref/collection/p15799coll3/id/246709>
- 10) 弓削、45.
- 11) 後醍醐天皇を扱った学術書として、Andrew Goble による *Kenmu: Godaigo's Revolution* (Harvard University Press, 1996) がある。
- 12) ジョン・ポーター「近世大阪の非人史における訳語問題」『都市文化研究』14号、2012年、102.
- 13) 宮内庁のホームページ参照。  
<http://www.kunaicho.go.jp/eindex.html>
- 14) 東京大学史料編纂所データベース「応答型翻訳システム」での検索結果に基づく。
- 15) ここにあげられた対訳語及び説明は、それぞれ次の学術書で用いられていたものである。
  1. Joan R. Piggott, *The Emergence of Japanese Kingship* (Stanford University Press, 1997).
  2. Herman Ooms, *Imperial Politics and Symbolics in Ancient Japan: The Tenmu Dynasty, 650-800* (University of Hawai'i Press, 2009).
  3. Joan R. Piggott, *Capital and Countryside in Japan, 300-1180: Japanese Historians Interpreted in English* (Cornell University East Asia Program, 2006).
  4. Joan R. Piggott, and Yoshida Sanae, eds., *Teishinkōki: What Did a Heian Regent Do? The Year 939 in the Journal of Regent Fujiwara no Tadahira* (Cornell University Press, 2008).
  5. Jean Reischauer and Robert Reischauer, *Early Japanese History (C. 40 B.C.- A.D. 1167), Part B* (Princeton University Press, 1937).
  6. Donald H. Shively and William H. McCullough, "Introduction," in Donald H. Shively and William H. McCullough, eds., *The Cambridge History of Japan, Volume 2: Heian Japan*, (Cambridge University Press, 1999), 1-19.
  7. Thomas Donald Conlan, *From Sovereign to Symbol: An Age of Ritual Determinism in Fourteenth Century Japan* (Oxford University Press, 2012).
  - 8,9. Paul H. Varley, trans., *A Chronicle of Gods and Sovereigns: Jinnō Shōtōki of Kitabatake Chikafusa* (Columbia University Press, 1980).
  10. John W. Hall, "Terms and Concepts in Japanese Medieval History: An Inquiry into the Problems of Translation," *Journal of Japanese Studies* 9.1 (Winter 1983): 1-32.
  11. Kozo Yamamura, ed., *The Cambridge History of Japan, Volume 3: Medieval Japan* (Cambridge University Press, 1990).
  12. Conrad Totman, *Early Modern Japan* (University of California Press, 1993).
  13. John W. Hall, ed., *The Cambridge History of Japan, Volume 4: Early Modern Japan* (Cambridge University Press, 1991).
  14. Marius B. Jansen, ed., *The Cambridge History of Japan, Volume 5: The Nineteenth Century* (Cambridge University Press, 1989).
  - 16) 直接の対訳語が掲載されていない場合、この欄は空欄となっている。
  - 17) その用語についての説明文。
  - 18) *Oxford English Dictionary*, <http://www.oed.com/>
  - 19) Ibid.
  - 20) Piggott, 8.
  - 21) Bruce L. Batten, *To the Ends of Japan: Premodern Frontiers, Boundaries and Interactions* (University of Hawai'i Press, 2003).
  - 22) Mikiso Hane, *Premodern Japan: A Historical Survey* (Westview Press, 1990).
  - 23) ジョン・ポーター「近世大阪の非人史における訳



- 語問題」14号、2012年。
- 24) ここで出てきた英訳を用いた文献の書誌データについては下記参照。
- ① Chitoshi Yanaga, "Materials in Japanese History: The Kamakura Period, 1192-1333," *Journal of the American Oriental Society* 59.1 (Mar. 1939): 38-55.
  - ② John S. Brownlee, "The Shōkyū War and the Political Rise of the Warriors," *Monumenta Nipponica* 24.1/2 (1969): 59-77.
  - ③ *Kodansha Encyclopedia of Japan* (Kodansha, 1983).
  - ④ Daisaku Ikeda, in Conversation with Masayoshi Kiguchi and Eiichi Shimura, *Buddhism and the Cosmos* (Macdonald, 1985).
  - ⑤ Ivo Smits, "The Poet and the Politician: Teika and the Compilation of the *Shinchokusenshū*," *Monumenta Nipponica* 53.4 (Winter 1998): 427-472.
- 25) ③と④は全く同じ英訳をしているが、これは④の著者である Daisaku Ikeda が1983年に出版された③の *Kodansha Encyclopedia of Japan* での英訳を採用したものかと考えられる。
- 26) 国史大辞典「女御」。
- 27) 弓削、103.
- 28) ここにあげられた対訳語及び説明は、それぞれ次の学術書で用いられていたものである。
1. Ijūin Yoko, Yoshie Akiko, and Joan R. Piggott, "Gender in the Japanese Administrative Code," four parts ("Laws on Residence Units," *Teikyō Shigaku* 28 (February 2013): 317-418; "Laws on Officials in the Back Palace(1)" *Senshū Shigaku* 55 (November 2013): 1-58; "Laws on Officials in the Back Palace(2)" *Senshū Shigaku* 57 (November 2014): 1-85; "Comprehensive Glossary" *Senshū Shigaku* 59 (November 2015): 1-23).
  2. William McCullough and Helen McCullough, trans., *A Tale of Flowering Fortunes: Annals of Japanese Aristocratic Life in the Heian Period*, two volumes (Stanford University Press, 1980).
  3. Royall Tyler, trans., *The Tale of Genji* (Penguin Classics, 2001).
  4. Varley, *A Chronicle of Gods and Sovereigns*.
- 29) *Oxford English Dictionary*.
- 30) *Oxford English Dictionary*.
- 31) *Cambridge Advanced Learner's Dictionary & Thesaurus*, <https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/>
- 32) 平成29年度より東京大学史料編纂所で行われている「日本史用語グロッサリーの蓄積と改良にむけて」共同研究において、「女御」の対訳語についても検討が重ねられた。また中宮・皇后については「empress」が90年代までは主流であったが、empress が女帝としての意味を持つことを理由に、ピジヨーを始めとした研究者の中で queen consort が使われて始めている。
- 33) テイモシー・エイモス「日本近世史と翻訳」『都市文化研究』14号 2012年、91-100.

### 参考文献

- 『六代勝事記・五代帝王物語』弓削繁校注 三弥井書店、平成12年
- 「後嵯峨院の時代とその歌壇」佐藤恒雄 国語と国文学 昭和52年5月
- 「中世歴史物語と摂政関白―『五代帝王物語』と『増鏡』を中心として―」福田景道 国語教育論叢 平成9年3月
- 「歴史の風 日本古代史の精緻化と史料英訳：日本史を日本人研究者だけのものとしないうために」義江明子 史学雑誌 124 (11)
- 「近世大阪の非人史における訳語問題」ジョン・ポーター 都市文化研究14号、2012年
- 「日本近世史と翻訳」テイモシー・エイモス 都市文化研究14号、2012年
- 東京大学史料編纂所データベース応答型翻訳支援システム
- Batten, Bruce L. *To the Ends of Japan: Premodern Frontiers, Boundaries and Interactions*. University of Hawai'i Press, 2003.
- Bialock, David T. *Eccentric Spaces, Hidden Histories. Narrative, Ritual, and Royal Authority from The Chronicles of Japan to The Tale of the Heike*. Stanford University Press, 2007.
- Brazell, Karen. "A Study and Partial Translation of Towazugatari." Ph.D Dissertation: Columbia University, 1969.
- Brownlee, John S. "The Shōkyū War and the Political Rise of the Warriors." *Monumenta Nipponica* 24.1/2 (1969): 59-77.

- Cambridge Advanced Learner's Dictionary & Thesaurus*. <https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/>
- Conlan, Thomas Donald. *From Sovereign to Symbol: An Age of Ritual Determinism in Fourteenth Century Japan*. Oxford University Press, 2012.
- Goble, Andrew. *Kenmu: Godaigo's Revolution*. Harvard University Press, 1996.
- Hall, John W. "Terms and Concepts in Japanese Medieval History: An Inquiry into the Problems of Translation." *Journal of Japanese Studies* 9.1 (Winter 1983): 1-32.
- Hall, John W., Marius B. Jansen, et al. Eds. *The Cambridge History of Japan*. 6 volumes. Cambridge University Press, 1989-1999.
- Hane, Mikiso. *Premodern Japan: A Historical Survey*. Westview Press, 1990.
- Ijūin, Yoko, Yoshie Akiko, and Joan R. Piggott. "Gender in the Japanese Administrative Code." Four parts ("Laws on Residence Units," *Teikyō Shigaku* 28 (February 2013): 317-418; "Laws on Officials in the Back Palace(1)" *Senshū Shigaku* 55 (November 2013): 1-58; "Laws on Officials in the Back Palace(2)" *Senshū Shigaku* 57 (November 2014): 1-85; "Comprehensive Glossary" *Senshū Shigaku* 59 (November 2015): 1-23).
- Ikeda, Daisaku, in Conversation with Masayoshi Kiguchi and Eiichi Shimura. *Buddhism and the Cosmos*. Macdonald, 1985.
- Japanese Historical Text Initiative (JHTI). University of California at Berkeley. <https://jhti.berkeley.edu/index.html>
- Kamei-Dyche, Rieko. "Tools of Authority: The Saionji Family and Courtier Society in Early Medieval Japan." Ph.D. Dissertation: University of Southern California, 2013.
- Kodansha Encyclopedia of Japan*. Kodansha, 1983.
- Mass, Jeffrey P. "Translation and Pre-1600 History." *Journal of Japanese Studies* 6.1 (1980): 61-88.
- McCullough, William, and Helen McCullough. Trans. *A Tale of Flowering Fortunes: Annals of Japanese Aristocratic Life in the Heian Period*. Two volumes. Stanford University Press, 1980.
- Ooms, Herman. *Imperial Politics and Symbolics in Ancient Japan: The Tenmu Dynasty, 650-800*. University of Hawai'i Press, 2009.
- Oxford English Dictionary*. <http://www.oed.com/>
- Perkins, George. Trans. *The Clear Mirror: A Chronicle of the Japanese Court During the Kamakura Period (1185-1333)*. Stanford University Press, 1998.
- Piggott, Joan R. *The Emergence of Japanese Kingship*. Stanford University Press, 1997.
- Piggott, Joan R. Ed. *Capital and Countryside in Japan, 300-1180: Japanese Historians Interpreted in English*. Cornell University East Asia Program, 2006.
- Piggott, Joan R., and Yoshida Sanae. Eds. *Teishinkōki: What Did a Heian Regent Do? The Year 939 in the Journal of Regent Fujiwara no Tadahira*. Cornell University Press, 2008.
- Ponsonby-Fane, Richard A.B. *Kyoto, the Old Capital of Japan, 794-1869*. Ponsonby Memorial Society, 1956 (originally 1931).
- Reischauer, Jean and Robert Reischauer. *Early Japanese History (C. 40 B.C.- A.D. 1167), Part B*. Princeton University Press, 1937.
- Smits, Ivo. "The Poet and the Politician: Teika and the Compilation of the Shinchokusenshū." *Monumenta Nipponica* 53.4 (Winter 1998): 427-472.
- Totman, Conrad. *Early Modern Japan*. University of California Press, 1993.
- Tyler, Royall. Trans. *The Tale of Genji*. Penguin Classics, 2001.
- Varley, Paul H. Trans. *A Chronicle of Gods and Sovereigns: Jinnō Shōtōki of Kitabatake Chikafusa*. Columbia University Press, 1980.
- Yanaga, Chitoshi. "Materials in Japanese History: The Kamakura Period, 1192-1333." *Journal of the American Oriental Society* 59.1 (Mar. 1939): 38-55.